

〈歴史パネル〉

日本への波及と日本の対応
—開放小国の視点から—

日本銀行 鎮目 雅人

1930年1月、日本は金本位制に復帰し、以後1年11ヶ月の間、金本位制を維持した。1931年9月に英国がポンドの金兌換を停止した後の日本は、資本流出を抑制するため2度にわたり公定歩合の引き上げを実施したが、市場参加者の間には、日本も英国に追随するのではないかとの予測が広がり、大規模な資本流出が発生したとされる。

1931年12月に大蔵大臣に就任した高橋是清の下で日本は、金本位制から離脱し、円安放任、長期国債の日本銀行引き受けを伴う財政拡張、金融緩和を実施し、他国に先駆けて世界恐慌からの回復を果たすとされている。

本報告では、中心国通貨であるポンドの危機がどのようなかたちで周辺国としての日本に波及し、これに日本がどのように対応したのかについて、歴史的、理論的観点から整理してみたい。その際、当時の世界経済における日本の位置付け、具体的には「開放小国経済 (small open economy)」としての日本という視点からの考察を行いたい。

[参考文献]

鎮目雅人『世界恐慌と経済政策—「開放小国」日本の経験と現代—』日本経済新聞社、2009年。